

**月例会ダイジェスト 【82】**

IoTやAI、クラウドなどのデジタル技術で、治療や予防医療に取り組むヘルステック（ヘルスメテクノロジー）。4月の月例会はそのヘルステックを取り上げ「ヘルステックと産業保健」というテーマで開催した。コーディネーターには佐藤文彦氏（Basical Health(株)、福田洋氏（順天堂大学）、小林宏明氏（住友商事(株)）が名を連ねた。

佐藤氏がヘルステックを含めたヘルスケア事業について概論を述べたあと、高橋透氏（(株)ニューチャーネットワークス／ヘルスケアIoTコンソーシアム）が、「日本における日本人のためのヘルスケアに関するIoTプラットフォーム構築」について発表した。

高橋氏は、まず自身が理事を務める産業界横断的組織「ヘルスケアIoTコンソーシアム」（以下、HIT）の前提となる「DX（デジタル・トランスフォーメーション）」の概念について説明。「全てのレイヤーがデジタル化されてつながり、企業や産業構造に変革をもたらす」と定義を述べた上で「あらゆる取引がデータ化され、収集・解析・活用されて新たな価値が生まれている」と他業界の事例を交えながら解説した。また、DXでは職種や業種を超えた連携（越境）が重要視されていることにも触れ、「他職種や多職種との連携によって生じる摩擦や抵抗を、乗り越えなくてはならない」と課題も示した。

次に、個人の健康データを当人の管理・運用の下で産業横断的に流通させる仕組みを作り、新たなヘルスケアサービスの創造と、人々の健康意識やQOLを向上させる社会の実現がHITのミッションであることも述べた。最後に「業種・業態による言語や思考の違いを楽しみながら議論してほしい」と、多職種や異業種との連携に必要なマインドセットを提示して、発表を終えた。

続いて佐久田誠氏（(株)エヌ・エイ・シー）が、「糖尿病専門医に監修してもらい、健診受診率向上に繋がる健診データを活用した未受診者対策」というテーマで登場。

佐久田氏は佐藤氏の監修のもと、健診結果の値や問診の回答、数年分の健診結果の推移等を加味して自動生成された個別アドバイスを、健診受診者に提供できる自社のサービスについて説明した。

さらに「各学会のガイドラインも参照しながら、医学的なエビデンスを取り入れた」と、情報の信頼性向上に苦心したことを明かした上で「ヘルステックと専門職の監修を組み合わせ、医学的エビデンスに基づいた情報を一人ひとりお届けしている。今後はヘルスケアや産業保健の分野でも、今まで以上

にエビデンスの重要性が増してくるのではないかと語った。

次に佐藤氏が「糖尿病専門医からみた、ヘルスケアとヘルステックの課題点と将来性」というテーマで再登場し、糖尿病治療で用いられているさまざまな血糖値測定器を紹介した。「今年からインスリン治療をしている全ての糖尿病患者が、保険で持続血糖測定器を使えるようになった。今後は、産業界のところへアプリを持って労働者が持続血糖値変動について相談に来るケースが増えるのではないかと、ヘルステックの浸透により産業保健職が医療的な領域に接する場面が増えると予想した。「ヘルステックが進化すると、ヘルスケアだけでなく医療的な部分もカバーできるようになり、両者のオーバーラップ化が進むだろう。全てのステークホルダーが、ヘルステックを介して連携していくことが求められるのではないかと訴えた。

最後に登場した福田氏は「ヘルスプロモーション専門家とヘルステック企業の協業とエビデンス構築」と題して、自身がこれまでに関わったヘルステック企業との連携の経緯について発表した。

「互いに補完して高め合う関係を作りたい」と考えた福田氏は、企業側と定期的にミーティングを行い医学や統計・疫学の知識、健康診断のデータの見方など医療側の知見をインプットしたという。そうした協業の中から、日本健康教育学会で企業が行った発表が優秀演題賞を受賞したり、アプリの歩数増加や生活習慣病予防効果を論文化したりするなどの成果が生まれたことも紹介。「ヘルステック企業は多々あるが、サービスを開発して、それを専門家に評価してもらうだけの“魂がない”ものは淘汰される。これからは、サービスの受益者（従業員、企業）を中心にして、ヘルステック企業や医療・研究機関、そして多職種が参加する議論の場が連携していくことが大事」とまとめた。

ディスカッションでは、「楽しくなければ行動変容は続かない。ゴールに至るプロセスを設計する際は、ユーザーの“ところ”に届くようなアプローチも必要」という意見や「ビジネス側も、エビデンスをしっかりと意識しなくてはならない」など、エビデンスとユーザーアクションを重視する企業のコメントが上がった。また「現場では、エビデンスが十分でなくても対応せざるを得ない課題も多い。データ収集と、エビデンスに基づくものがうまく連携できるというのかもしれない」という産業保健側からの提案もあった。

最後は「ポンと世に出たアプリで成果があったからといって、すぐ保険収載されるわけがない。ユーザー、開発企業、ドクターなどの思いが繋がって社会を動かすことになるのだと思う」という総括的な提言が出され、継続的な議論が期待されながら閉会となった。

さんぽ会の詳細は下記サイトをご覧ください。

- ホームページ <http://sanpokai.umin.jp>
- FB ページ <http://www.facebook.com/sanpokai>